

兵庫県豊岡市における実践事例

公立豊岡病院出石医療センター総合診療科
守本陽一

【背景】本邦では、人口減少、過疎化等の社会構造の変化に伴い、地域の相互扶助や家族同士の助け合いなど、支え合いの機能の希薄化が問題とされている。社会保障や産業などの領域を超えてつながり、地域社会全体を支えていくことが重要である。厚生労働省は、制度・分野ごとの縦割りや「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがいとともに創っていく地域共生社会の実現を目指している。地方都市である兵庫県豊岡市の市街地はロードサイドにチェーン店が進出し、商店街の空き店舗が目立ち、中心市街地の空洞化、高齢化に伴い、地域コミュニティの希薄化が進んでいる。家庭医療専攻医である筆者は、これらの課題解決のため、2016年から同地域で移動式屋台によるカフェ型ヘルスコミュニケーションとして、モバイル屋台de健康カフェ「YATAI CAFÉ」を行っている。さらなる活動として、2020年12月に空き店舗をシェア型図書館「だいかい文庫」にリノベーションする取り組みを行った。

【結果】モバイル屋台de健康カフェは孫らがアクションリサーチの一環として、2016年9月より実施していたものである。医療者は医療者であることを前面に出さず、コーヒーの提供を通じたカジュアルな対話を行うため、ナラティブな語り期待でき、無関心期にある住民へのリーチができる。豊岡市では2016年12月から月1回程度継続して開催している。また活動を行う中で見えてきた役割として、疾患を抱える人の外出のきっかけ、コミュニティ等の地域資源を医療者が知る機会、地域住民の井戸端会議の場になっている。シェア型図書館は、一箱本棚オーナーとなる住民が月々定額の料金で本棚をレンタルし、本を並べ、利用者はその本を無料で借りることができるシステムである。だいかい文庫のオープンにあたって、2020年9月に物件を借り、10月11日に計2週間、住民と共にリノベーションすることで、12月のオープン前に場の存在を周知することができた。費用はクラウドファンディング及び社会福祉協議会の助成金をリノベーション費用に充て、本棚オーナーのレンタル代を維持費に充てることで持続可能な形とした。2021年11月現在、合計約1000冊が借りられており、広く地域住民に活用されている。医療福祉従事者、メディア関係者、行政職員、教員、アーティストなど約70名程度の一箱本棚オーナーがおり、交互にお店番を行っている。一箱本棚オーナーは本棚を自らの表現の場としてだいかい文庫を活用するとともに、人や本と出会う場として活用している。また医療者が営む場であることから、アルコール依存症患者、統合失調症患者、うつ病経験者など多様な方が居場所として活用されている。また月4回各1時間程度ずつ居場所の相談所として、医療福

シンポジウム

社従事者が相談の場を設けており、居場所の相談に来られた方がだいかい文庫に役割や居場所を見つけている。また相談者を一箱本棚オーナーさんらとつなげ、地域に居場所を見つけることもある。

【考察】YATAI CAFE/だいかい文庫は、相談支援、参加支援、地域づくりへの支援を行う地域共生的な場になっている。疾患ごと、年齢ごとの縦割りではなく、本/コーヒーというテーマでコミュニティを作ること、障害、疾患の有無に関わらず、子どもから高齢者まで多世代の居場所を作ることができた。また本棚という区画で自分を表現できる場を持つことから一箱本棚オーナーが増えている。さらにお店番という形でまちに関わることで役割が生まれている。お客さん、一箱本棚オーナー、お店番等、本に関心があれば自分にあった形で地域に関わることができる点も利用者が多い要因だと考えられる。また一箱本棚オーナーさんやYATAI CAFÉで訪れる場所を通じて、地域の多層的なネットワークの構築に寄与しており、ネットワークを活用した社会的処方の実践を行っている。